

III 今月のトピックス

【建国60周年を迎えた中国の穀物事情】

中国は今年建国60周年を迎え、10月には盛大に記念行事が各地で開催された。世界同時不況の中においても、8%台の経済成長を続ける巨大中国の胃袋を支える穀物生産について、今年の収穫状況を中心に振り返ってみる。

1. 中国の穀物生産について

中国は世界的にも穀物の主要生産国で、米は世界1位、小麦はEUを1カ国にカウントすると世界2位（単独では世界1位）、とうもろこしは米国に次いで世界2位の生産量を誇っている。穀物総計でも約4億トンの生産量で米国と世界1位を争っている。統計が残っている1960年と比較して、米は約3倍、小麦は約5倍、とうもろこしは約10倍にまで生産量が増加した。

しかしながら、13億という人口を抱えているため、穀物の消費量も世界1位である。現時点の需給バランスをみると米や小麦、とうもろこしについては自給を確保しているものの、大豆の生産量は年々減少しており、現在では7割強を輸入に依存し、世界の貿易量の約半分を占めている。しかも、将来的な人口の増加等を考慮すると、大豆以外の穀物についても大輸入国に転ずる可能性を否定できない。

2. 2009年産の収穫について

中国の本年の穀物の生産動向については、とうもろこしは、東北地方で受粉期の干ばつの影響を受け減産となったが、米は、東北地方で灌漑が行われており干ばつの被害が少なかったこと、中・南部地方で台風の被害が例年より少なかったこともあり、史上最高の単収の見込みである。また、小麦も収穫面積の増加から前年より増産と見込まれている。

一方、大豆については、主産地である東北地方でのとうもろこしへの作付面積のシフトや、生育期の低温等の被害を受け、減産すると見込まれている。

人手による米の収穫(黒龍江省)



稲を刈取り後乾燥中(黒龍江省)
背後は収穫前のとうもろこし

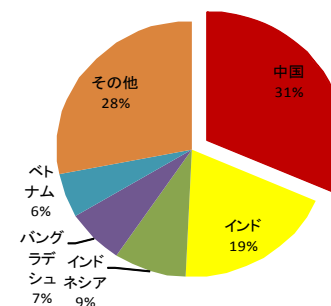


灌漑用水路(吉林省)

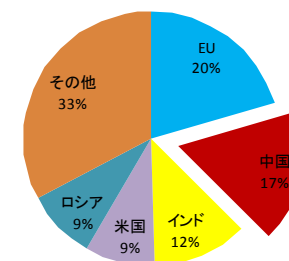


図 世界の穀物の生産量と中国のシェア

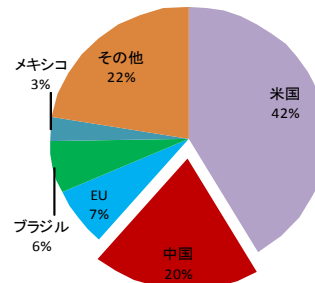
米(精米 世界4.3億トン)
うち 中国1.4億トン 1位



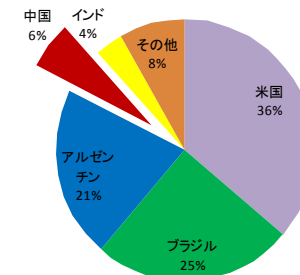
小麦(世界6.7億トン)
うち 中国1.1億トン 2位



とうもろこし(世界7.9億トン)
うち 中国1.5億トン 2位



大豆(世界2.5億トン)
うち 中国15百万トン 4位



資料：2009年12月 USDA (PS AND D) 数値は2009/10年度

3. 穀物の増産施策について

このような需給状況を踏まえて、中国政府は食料自給率95%確保を目標に食料の増産政策を推進している。

米、小麦、とうもろこし、大豆といった主要作物の生産増強のためには農家の生産意欲を高め、作付面積を広げる必要があることから、毎年最低買い上げ価格を定めて買い上げを行っている。

本年度についても、国家発展改革委員会・財政部・国家糧食局・中国農業発展銀行の連名で、2009年の東北地方の穀物の買い上げについての通知が行われた。とうもろこし、大豆に関する主な内容（抜粋）は以下のとおり。

- ・とうもろこしの買い上げ価格：遼寧省、内蒙古自治区：1.52元/kg、吉林省：1.5元/kg、黒龍江省：1.48元/kg（いずれも3等相当 1元=約14円）
- ・大豆の買い上げ価格：上記東北4省：3.74元/kg(3等相当)
- ・買上期間：2009年12月1日～2010年4月30日

※昨年産については、とうもろこし4千万トン、大豆725万トンといった備蓄計画数量が公表されたが、本年についてはまだ公表されていない模様。

4. 穀物の備蓄について

このようにして毎年、政府が買い上げを行った穀物については、各地の国有、省所有及び民間の倉庫に備蓄される。

国家発展改革委員会が10月に公表した資料によれば、2009年4月時点で中国の国有食料企業（倉庫等）に備蓄されている穀物は2億2,540万トンとされている。本年4月以降、中国の国務院等10の機関が共同で、穀物を備蓄している倉庫に対して実在庫と帳簿上の在庫数量等の照合作業等の調査を行った結果、一致率は99%を超える結果と発表されている。

中国においても、穀物の実際の備蓄数量についての不信感が強く、最近、一部倉庫で実在庫と帳簿の不一致の問題が表面化したため、今回徹底調査を行ったとのことである。

5. 穀物の競売について

政府の備蓄穀物については、一定期間の備蓄を行った後、競売にて実需者に売却される。

入札については毎週、穀物ごとに火曜日はとうもろこし、水曜日は大豆といった形で実施されている。

各省ごとに備蓄穀物のメニューリストを作成し、入札前日に安徽省の合肥穀物取引所のインターネットサイト上に在庫場所や等級、数量等について公表し、そのメニューに従って実需者が電子入札等の方法で入札を行う方式をとっている。

とうもろこしについてはコーンスターチ、エタノール等の加工用向け、大豆については搾油向けの用途について、入札した企業に対しては別途補助がされる仕組みとなっている。補助額については、報道等によると、とうもろこしで150元/トン、大豆で210元/トンとも言われている。企業は落札後、帳簿にて使用量の確認がなされ、その後、使用量に応じた補助額を受け取る仕組みとなっている。

しかしながら、2008年産大豆を例にとると、秋の新穀の収穫に備えた在庫スペースの確保のため、本年7月下旬から11月25日までに約840万トンの競売（再競売あり）が行われたが、最低価格が国内の市場価格を上回っており（9月の新穀の市場価格より100元/トンほど高い）、旧穀では魅力に乏しいこともあって、約14万トンの落札に留まっている。

なお、本年12月以降、東北地区に在庫しているとうもろこし、大豆の競売入札については、2009年産の新穀の買入が始まることもあり、一時休止となっている。

干ばつの被害を受けたとうもろこし(吉林省)



精米工場での天日乾燥（黒龍江省）
収穫期は雨が降らないため可能だとの由



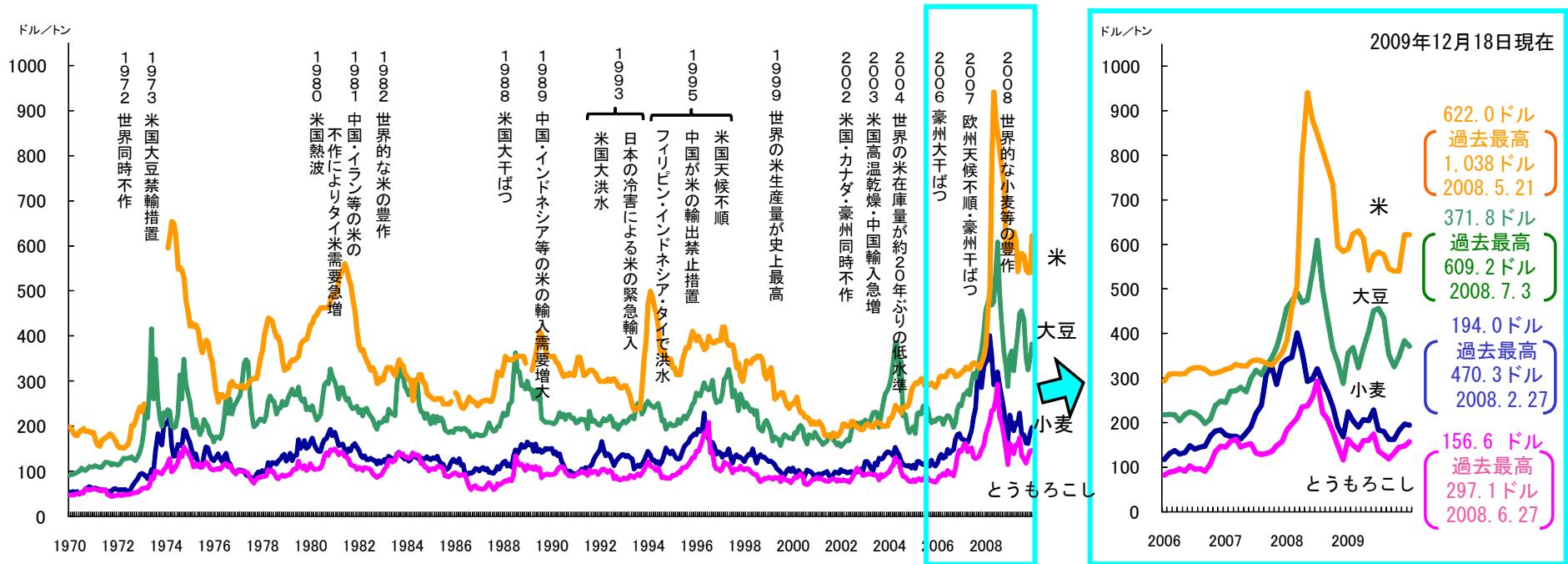
大連の国家備蓄倉庫(遼寧省)



(参考) 世界の農産物価格の動向 (ドル/トン)

- 穀物等の国際価格は、2006年秋頃から上昇基調で推移し、2008年春から夏にかけて最高値を更新。その背景には、穀物市場への投機資金流入といった要因もあるが、基本的には、① 中国等の途上国の経済発展による食料需要の増大、② バイオ燃料による需要増大、③ 地球規模の気候変動の影響といった中長期的に継続する構造的な要因のほか、輸出国の輸出規制があった。特に米は、貿易量の割合が低いことから、価格変動幅が特に大きかった。2008年夏以降は、小麦等の豊作予測などに加え、世界金融危機による投機資金の流出、世界的な不況による穀物需要の減退懸念から最高値に比べ大幅に低下した。
- 2008年末以降、南米での干ばつ、米国の天候による作付けの遅れ、中国の旺盛な大豆の輸入需要等により、穀物価格は、再び上昇基調で推移。その後米国が良好な天候に恵まれたこと等から値を下げたものの、2006年秋頃に比べ1.4～2.0倍の水準。

□ 主要農産物の国際価格の動向



注：小麦、とうもろこし、大豆は、各月ともシカゴ商品取引所の第1金曜日の期近価格である。

米は、タイ国貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注1：各月第1金曜日(米は第1水曜日)に加え、直近の最終金曜日(米は最終水曜日の価格)を記載。
注2：米以外の過去最高価格については、シカゴ商品取引所の全ての取引日における最高価格